デート DV の被害経験とアタッチメントスタイルとの関連

○岡島泰三

(関西学院大学文学研究科)

キーワード: デート DV アタッチメントスタイル 青年期

The relationships between dating violence and attachment styles

Taizo Okajima

(¹Graduate School of Kwansei Gakuin Univ.)

Key Words: dating violence, attachment styles, adolescence

目 的

近年, 交際期間におけるパートナーからの暴力, デート DV が問題になっており, その実態が明らかになってきた (例えば, 内閣府, 2009). しかし, このようなデート DV を誘発する要因に関する研究はまだ不十分であり, 要因の解明に至っているとは言いがたいのが現状である. 藤田・米澤 (2009) によると, デート DV の加害・被害者になるかどうかという一つの要因は, 家族に対する感情の正負に関わっているという. 家族に対して肯定的な感情を持っている場合, デート DV の被害者になることはなく, 家族に対して否定的な感情を持つ場合, その逆になる. 同様に, 松波ら (2012) は, 子ども時代の親子関係の認知が, 基本的信頼感に影響を与え, その基本的信頼感がナルシズムを介してデート DV の加害・被害経験に影響を与えることを示した. 先行研究から, 過去・現在の親子関係がデート DV と関連することが考えられる. Bowlby (1988) は, 個人が乳幼児期の乳児-アタッチメント人物関係において形成された内的作業モデルに沿って, その後の対人関係を選択することを示唆しており, 不安定なアタッチメントスタイルを持つ個人は, デート DV を行う人をパートナーとして選択しやすいのではないかと考えられる. そこで, 本研究では, 青年期のアタッチメントスタイルとデート DV の被害経験との関連を検証した.

方 法

被調査者: 本研究は, 大学生 116 名 (男性 38 名, 女性 78 名) を対象に行った. 平均年齢 19.6 歳 (SD = 1.62) であった. このうち, 現在までに交際したことのある 68 名 (男性 21 名, 女性 47 名) を本研究の対象とした.

測度: 本研究では, アタッチメントスタイルを測定するために日本版関係尺度 (加藤, 1998/9), デート DV の有無を測定するためにデート DV 被害者・加害者尺度 (以下デート DV 尺度; 小泉・吉武, 2008) を用いた. 日本版関係尺度は 4 つのアタッチメントスタイル (安定型, 回避型, とらわれ型, 拒絶型) から 1 つを選ぶものである. また, デート DV 尺度は, 元来 15 項目であったが, 上野ら (2012) の再分析によって, この尺度は 3 つのデート DV 因子 (身体的暴力, 性的暴力, 精神的暴力) 11 項目から成ることが示されているため, 本研究においても 11 項目を用いた. また, 本研究ではデート DV 被害について検討するために, 被害者尺度のみを用いた.

結 果

アタッチメントスタイル 本研究では, 安定型 10 名 (男性 2 名, 女性 6 名), 回避型 6 名 (男性 2 名, 女性 4 名), とらわれ型 30 名 (男性 9 名, 女性 21 名), 拒絶型 22 名 (男性 7 名, 女性 15 名) であった.

デート DV 被害の経験 本研究ではデート DV の被害経験があった個人は 43 名 (63.2%; 男性 12 名, 女性 31 名) であり, 1 度も経験のない個人は 25 名 (36.8%) であった. 被害経験者の

中で複数回以上経験があった個人は 34 名 (全体の 50%; 男性 8 名, 女性 26 名) であった.

デート DV 被害の経験とアタッチメントスタイル 本研究では, 各デート DV 尺度の回答はデート DV 被害経験を複数回以上あるか (いつも受けた・複数回受けた) ないか (1 回受けた・受けたことがない) に分けて分析を行った. 各デート DV 被害者がどのようなアタッチメントスタイルを保有しているかを検証するために, χ^2 乗検定を男女別に行った. その結果, 女性において, 身体的暴力の被害経験の有無とアタッチメントスタイルとの有意な関連が示された, $\chi^2(3) = 11.14, p < .05$ (Table 1). 残差分析より, 回避型の個人は, 身体的暴力を複数回経験したことが多く, とらわれ型の個人は, 身体的暴力を複数回経験したことが少なかった. また, 女性において, 性的暴力の経験の有無とアタッチメントスタイルとの有意な関連が示された, $\chi^2(3) = 9.62, p < .05$ (Table 1). 残差分析より, 安定型の個人は, 身体的暴力を複数回経験したことが多く, とらわれ型の個人は, 身体的暴力を複数回経験したことが少なかった. 精神的暴力の被害経験の有無とアタッチメントスタイルとの有意な関連は示されなかった. 男性において, 各デート DV の経験の被害有無とアタッチメントスタイルとの有意な関連は示されなかった.

Table 1 デート DV の被害経験とアタッチメントスタイル

	安定型	回避型	とらわれ型	拒絶型	合計
身体あり	3	3	1	5	12
身体なし	5	1	20	10	36
性的あり	5	3	3	5	16
性的なし	3	1	18	10	32

考 察

本研究では, デート DV の被害経験の有無とアタッチメントスタイルとの関連を検証した. 回避型アタッチメントスタイルを持つ女性は, パートナーからの身体的暴力を経験することが多かった. 回避型アタッチメントスタイルを持つ個人は, 乳幼児期に親から威圧的な養育態度を受けていることが多く, このような態度を取る人をパートナーとして選択しやすいと考えられる.

一方で, 予測に反して安定型アタッチメントスタイルを持つ女性は, パートナーからの性的暴力を経験することが多かった. この結果は先行研究と反するものである.

さらに, 男性のデート DV の被害経験に関して, アタッチメントスタイルとの関連は示されなかった. 本研究と同様に, DV 加害・被害経験の要因を探索した研究においても, 男性では有意な関連を示さないことが多い (例えば, 松波ら, 2012). デート DV の被害経験に関連する要因が男女で異なるメカニズムを持つと示唆されており (上野ら, 2012), 今後は男性に重点を置いた DV 被害経験の解明が求められる.